
きっとその瞬間に

明日ナロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きつとその瞬間に

【Nコード】

N4067Z

【作者名】

明日ナロ

【あらすじ】

なんだか知らないけど私異世界にきちやいました！
そしてなんだか知らないけど話進んじやってません？私抜きで！ふざけんなっ！

平凡な彼女が周囲の人々に影響を与えながらゆっくりと進む異世界物語。

けっこう主人公溺愛されていますが性格はドライ？

プロローグ

私はごく普通の

一般家庭に生まれた。

父、母、兄が二人に私の五人家族である。

父、篠崎 賢之助は、まだまだ現役のサラリーマンだ。ちなみに部長。

母、篠崎 桃子は、専業主婦。

そして、社会人の上の兄に
大学四年の下の兄。

最後に今年大学生になったばかりの私、篠崎しのなみ 透とあである。

3

あ。ちなみに

上の兄は篠崎 修斗

下の兄は篠崎 郁斗という。

…と。

ここまでは

何処にでもいるような普通の家族だ。

しかしながら

うちの家族は一つだけ

異常な点が存在するのだ。

そう、まさに異常。

何が異常かということ
それは、家族全員（私を除く）が大変見目麗しい顔をしていらっしやるということ。

父、賢之助は
常に危険な色気がただよい眼鏡が最高に似合う美人さん。

母、桃子は
グラマーなボディに
ロリロリな顔という危険な組み合わせの美女。

上の兄、修斗は
父の遺伝子を
色濃く引き継いだ美形。

下の兄、郁斗は
今どきの爽やか系イケメン。

そして、
どこを間違ったのかふつーの顔で生まれてきた私。

きつと、これからずっと平凡な顔で美形な家族に振り回されつつも、
平凡な毎日を過ごすものだと思っていた。

あの時、

あんなことが起こるまでは。

その日は朝からなにも変わっただことのないふつーの一日だった。

朝6時に起床し、朝食を作り、超絶美形のうちの家族を起こしに二階へ。なぜかうちの家族は、揃いも揃って低血圧だ。低血圧って美形のステータスなんだろうか。まあそんな感じで家族起床。

「おはよー。父さん母さん。」

「ん。」

「おはよう。透ちゃん」

父さんと母さんに挨拶をすると、短いながらも返事が返ってきたので安心した。ひどいときには、寝ながらご飯食べるからね…この人達。

と、そうこうしてるうちに後ろに重みが…

「郁兄ー？抱きつくのやめて。私いま味噌汁ついであるんだけど…」

「んー？透は今日も可愛いなあ。」

話にならないので応援をよぶ。

「修兄ー！郁兄どうにかしてー！」

これでよ…

「郁斗、離れる。俺の番だ。」

何を言ってるのだ。こいつは。そこから意味不明な喧嘩をし始めた二人を無視して、ご飯を食べて学校へ。

そして、なんやかんやで帰宅。私は剣道部なのでいつもは遅くなるのだけれど、その日は休みで早く帰ることができて、ホクホクした気持ちで帰ってきた。

いや。帰ろうとした。いつもの道をたどって最後の交差点にたどり着いたとき、それは起こった。五歳くらいの男の子が、ボールを追って道路に飛び出す。正確には、トラックの前へ。

あっ！っと思った時には体が動いていて、男の子を押し退けていた。目の前に迫るトラック。

周りの騒音。そのすべてがゆっくりに聞こえて、私は場違いに思った。ああ…なんかこれが走馬灯ってやつかな？いや違うか。思い出してないし。じゃあなんて言うんだろ。これって。

近づくトラックのライトが眩しくて目をぎゅっと瞑った。最後に浮かんだ家族の顔にごめんねと囁いて、私の意識は真っ暗な闇に吸い込まれていった。

02 (前書き)

間違えがあったら指摘してくださると嬉しいです。

暗く静かな闇の中で私は光を見ていた。その光の球体は、私の前に浮かんでいて、私はそれをただ見ていた。心の中で、早く立ち上がって出口を探さないと、と考えていたけれど体が動かない。そして、置いてきてしまった家族のことを想った。

父さんと母さんは今日帰ってくるの遅いよなあ。修兄と郁兄は、ご飯作れるのかなあ。確か二人はなんでも出来るくせに料理だけは、下手だったから今頃喧嘩してそうだ。みんなは朝起きられるかなあ。会社に遅刻したら大変なことになっちゃう。

早く帰らなきゃ。早く早く。そう思ったらようやく立ち上がる気力が湧いてきた。よしっ！と気合いを入れて立ち上がってみる。足は、地面で擦れて怪我をしているかと思ったけど無傷だった。まあ傷がないのにこしたことはない。このよくわからない空間から出なきゃ。

すると私の前でふわふわと浮かんでいた光る球体が、ゆっくりと動き始めた。まるでついてこいって言うているみたいだ。

まあ、何処にいけばいいか分からないからついていくことにした。真っ暗な闇の中を小さな光を頼り歩く。不思議と恐怖はなかった。そして、光が唐突に止まった。

ここまで…？いや…暗いままなんですけど。不審に思って光に目をやると、言い訳がましく動いている。

…なんかやな予感がする。と思った瞬間に光が弾けた。眩しくて目を瞑る。ああ、また意識を失うのか。さすがに二回目ならもうわかるぞ！

でもこれで出られるかもしれない。早く家族に会いたいなあ。

立て続けに考える頭の中で、囁く声を最後に意識を手離す。確かに私は声を聞いた。

ごめんね。でも特典は沢山つけたから。そこらへんは安心してね。

ってどういふことでしょうか？

03 (前書き)

今更だけど主人公がふわふわして定まらにくい… (T—T)

…おいっ…これは…

人の声。

あれ？私帰れたのかな？それにしても五月蠅いな。

…なんで…召喚しなおせっ…

ん？？召喚？なんのことだ？

考えているうちに、体が誰かに蹴られた。

「おい。起きろ」

いてっ！足でやったな！ふざけんな！衝撃によってボヤけていた頭がクリアになって、意識が戻ってきた。目をゆっくりと開くと、そこは見たこともない光景だった。

…もう一回気絶しちゃおうかな。うん。そうしよう。

再び目を瞑ろうとすると、先程私を足で蹴った人に、

「おい。起きろ。王の前で無礼だぞ」

と言われたので仕方なく目を開けた。

…やっぱりおかしい。ここは何処なんだろう。

まず人の様子からして違う。見渡す限りの原色の頭。ピンク、金色、青に赤。あ、オレンジまで。チカチカするな。

不思議と一番いそうな黒は見当たらない。昔から色素の薄い、私の髪と同じ茶色も一人もいなかった。

そして、服装もどこの映画ですかってくらい違った。よくあるおとぎ話の舞踏会みたいな格好。

私のような、純粹な日本人では到底着こなせないけど、ここにいる人達は、みんな西洋風の顔立ちをしているので、違和感はありません。感じられない。

あれ？ていうかさっきの人、王がなんちゃらって言ったような。じゃあここは王宮って訳か。

へー。王宮ね。

ほー……………って！

ダメじゃん！一番厄介だ！なんか巫女とか呼んだのかな？無理無理無理無理！

私はどうひいきめにみてもTHE平凡だし、特殊能力とかないし。どうしよう！殺される…よくて豚の餌とかだ。あーっもう！運なさ過ぎ！家に帰りたいただけなのに！

私はまとまらない考えのなかで一つの解決策を導き出した。それは、絶対に逆らわないようにして、なんとかこの場を乗り切り、とりあえずこの厄介な場面を回避する。というものだ。なんとかなる。よし平常心、平常心…。

「王。どうされますか？」

そんなときまた声が聞こえる。

今喋ったのは、先程私を蹴った金髪の人の隣にいる、青に少し黒を混ぜたような髪の色の人だ。

王って…あれ？あの真ん中の人か？髪が真っ黒だ。

にしても凄い美形だな。王様っていう割りには若いな。私は耐性があるけど、馴れてない人が見たら、倒れそうだ。

そんな美形の王を観察していたら、今まで黙っていた王が一言言い放った。

「つまらん。殺せ」

…え

「私も同意見です。早く連れていきなさい。目障りです」

…は？

「しかしっ！もう一度召喚することは困難ですっ」

「別にかまわん。早くしろ」

そのとき、さっきまで立てた私の『THE平凡人間生き残り計画』が音をたてて崩れさった。

かわりに心の何処かで、何か切れるのを感じた。燃えるような体

で立ち上がる。そして、王様のもとへゆっくりと歩きだした。異変に気がついたらしい周りの兵らしき人達が、私の前に立ちふさがった。感情に任せて一言だけ言う。

「どきなさい」

兵が強張った顔で、後ろに下がった。そこを進む。

王様の前まで来た私は、真っ直ぐに王様を見て口を開いた。

「ねえ？説明してくださいますか？」

まるで、出来の悪い子供に言い聞かせるように微笑んでみせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4067z/>

きっとその瞬間に

2011年12月26日00時46分発行